

メルヒェン事典でみる「さまよえるオランダ人」

酒 井 友 里

はじめに

さまよえるオランダ人といえ、現在ではもっぱらワーグナー (Richard Wagner, 1813-1883) の楽劇『さまよえるオランダ人』 („Der fliegende Holländer“, 1841) として知られているが、本来は、船乗りたちの間や港町周辺地域に広まっていた幽霊船に関する伝説の一つである。この「さまよえるオランダ人」の伝説そのものは、おそらく16世紀頃には存在していたと思われる。しかしながら、この伝説を題材やモチーフとした文学作品 (以下、「オランダ人物語」とする) が成立するのは、ようやく19世紀になってからのことである。現在オランダ人物語として紹介されている作品は、英文学に始まりアメリカ文学、ドイツ文学、フランス文学というように多岐にわたる。それでは、ドイツのメルヒェン事典 „Enzyklopädie des Märchens“¹ (以下、「事典」とする) の „Fliegender Holländer“² の項に添って、どのようなオランダ人物語があるのかを紹介していく。

1. 概念と出典

Fliegender Holländer (Flying Dutchman) は、事典によると、19世紀には有名で且つ典型的な船乗りたちの信仰伝承であり、その語は、大洋を永久に航海し続けなければならないという永劫の罰を下された、幽霊船

1 Ranke, Kurt : Enzyklopädie des Märchens : Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung. Bd. 4. Berlin, New York : 1984.

2 Vgl. Ranke 1984, S. 1299ff.

そのものか、もしくはその幽霊船の船長を示している、とある³。実際にオランダ人物語とされている作品を読んでもみると、さまよえるオランダ人、またはオランダ船が単に作品のモチーフとしてのみ用いられているものと、物語の中に実際に登場するものとのがあるが、前者は文学作品として現れ始める初期の頃に多い。例えば、英国の作家コウルリッジ (Samuel Tayer Coleridge, 1772-1834) の『古老の船乗り』 (“The Rime of the Ancient Mariner”, 1798)⁴ やスコット (Walter Scott, 1771-1832) の“Rokeby” (1813) が有名である。中期以降の作品にはオランダ船の船長が物語において重要な役割を担っていることが多い。これらの作品の例としては、ドイツの作家スミット (Heinrich Smidt, 1798-1867) の „Der ewige Segler“ (1828) やハウフ (Wilhelm Hauff, 1802-1827) の童話集『隊商』 („Die Karawane“, 1826) に収録されている『幽霊船の物語』 („Die Geschichte von dem Gespensterschiff“) などがあ

る。事典には、オランダ人伝説が後世に残る形式となっているものは、そのほとんどが文学作品としてであり、それらのほとんどが19世紀前半のほんのわずかな時期に集中している、とある。しかしながら、オランダ人伝説がどのような過程を経て文学作品として残されるようになっていったのかという成立史についてはまったくふれられていない。この傾向は、オランダ人物語の研究領域においても同様で、これまでのところ、文学作品の成立史についての研究は、ほとんど皆無といってよいであろう。

3 本論では「さまよえるオランダ人」としている。これは冒頭でも述べたようにワーグナーの作品が最も知られており、またそれらのほとんどが『さまよえるオランダ人』と訳されていることによる。

4 この作品をオランダ人物語とするかどうかについては、議論の余地があると考えられる。なぜなら、この作品にはさまよえるオランダ人も船も登場しない。さらには、コウルリッジが題材に用いたと考えられているものにオランダ人伝説は含まれていないからである。

また、日本や英国などで現在発行されている事典などを調べてみても、オランダ人物語の例として挙げられているものもあれば挙げられていないものもあり、評価はさまざまである。

2. 物語の内容

オランダ人伝説は、①呪いをかけられることになった出来事、②信仰の労苦を負った幽霊船、という二つの題材から成っている。事典には、「(物語の内容は) 1821年より具体的になった」と記され、ハイネ (Heinrich Heine, 1797-1856)⁵ やワーグナーなどの具体的な作品も例に挙げてオランダ人物語の内容について説明しているのであるが、その内容は、ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン (Blackwood's Edinburgh Magazine) 1821年5月に掲載された作者不明の物語 “Vanderdecken's Message Home ; Or, the Tenacity of Natural Affection“ (1821) に由来していると考えて間違いないであろう。なお、この作品は、作者不明のままドイツ語にも翻訳されており⁶、これより後のオランダ人物語に少なからず影響を与えたことは、それぞれの作品と詳細に比較していくと明らかである。

3. 題材とモチーフの変遷

船乗りたちは特に信仰心が厚いと言われているが、それ故に多くの迷信も彼らの間では信じられていた。航海術や船舶そのものが未発達であった頃は、なおのことであろう。また、航海上で実際に起こった出来事は、彼らの迷信に大きな影響を与えたと考えられる。例えば、かの有名な喜望峰では、複雑な潮流と風の影響で、遠くに見える船は非常に不可解な動きをしているように見えた。また、蜃気楼や単なる難破船に出会ったとき、それらを幽霊船と見間違えたとしてもおかしくはない。船乗りたちの強い信仰心から生まれた迷信と、航海上で実際に起こった出来事とが融合し、さまよえるオランダ人の伝承となって船乗りたちの間に伝えられ、さらにその伝承は港から「上陸」し、周辺地域、内陸部へと広がって行ったのであろうことは想像に難くない。

5 Heine, Heinrich : Aus den Memoiren des Herren von Schnabelewopski, 1833.

6 anonym : Vanderdecken's Botschaft in die Heimath, oder Gewalt der Verwandtenliebe. In : Morgenblatt für gebildete Stände, Nr. 165-167, 1821.

幽霊船の目撃談は、バスコ・ダ・ガマの初めてのインド洋航海（1497年）の頃にまでさかのぼる。17世紀のポルトガルのアフリカ大陸周航に続く、オランダ、イギリスによる東インド貿易の繁栄は世界史上周知のことであるが、この東インド貿易においてオランダが衰退し、イギリスが取って代わる頃、さまよえるオランダ船との遭遇に関する最初の報告がなされたという。しかし、これに関して事典では、かつてのオランダの繁栄に対するイギリスの皮肉が反映されたもの、という見解がなされている。例えば、イギリスの劇作家フィッツボール（Edward Fitzball, 1792-1873）の“The flying Dutchman or the Phantom ship”（1826）である。この劇作品においては、さまよえるオランダ人船長の恋敵役に一人の英国人航海士が登場するが、この構図はオランダ対イギリスを表しているといわれる。この作品は1820年代のロンドンで大成功を収めた演目だということであるが、その成功要因は、オランダ人に対して英国人が勝利するという結末が、当時の世相に受け入れられたからであるという意見が大半を占める。

既に述べたように、1820年代以降に書かれた作品から、さまよえるオランダ人船長が物語の中心を占めるようになってくる。それと同時に、とっくの昔に死んでしまった人に宛てられた手紙やオランダ人船長の呪いからの救済、さらにはその救済の役割を女性が担うというように恋愛要素などが付け加えられるようになる。『たとえ永遠にこの海上を航海することになったとしても、私はこの嵐の中を航行するのだ』というオランダ人船長のいわば決め台詞が登場するのもこの頃からである。そしてこの神に逆らい、神を冒瀆することによって与えられた、オランダ人船長の永劫の罪は、たびたび他の文化圏にある物語、例えば「永遠のユダヤ人」の伝説などと比較されている。

さて、事典では、1841年にドイツの娯楽雑誌に掲載された話⁷に触れ、東インド貿易におけるかつてのオランダの栄華を、幽霊船の船長としてのみ特徴付けるのではなく、一人のオランダ人として大胆に個性化

7 anonym : Über den Ursprung der Sage von dem fliegenden Holländer, oder Gespensterschiff. In : Das Ausland. Ein Tageblatt für Kunde des geistigen und sittlichen Lebens der Völker, Nr. 237. 25. August 1841, S. 945-946.

し、特にオランダ語の名前をつけることによって、強調しようとしていると結論付けている。確かに、この物語の主人公であるオランダ人船長は、これまでのオランダ人物語に登場する船長よりも非常に個性的で大胆な性格描写がなされているが、例えば、先に挙げたフィッツボールの作品に登場する、悪魔と契約し魔力を操ることのできる船長などと比較すると、一方で非常に人間的である。それゆえ、17世紀初頭という時代では到底成し遂げられなかったであろう彼の航海の様子などから、事典ではこの物語を創作ものとしてみている向きがあるが、一方で、この物語は、オランダ人伝説の伝承に非常に重要な作品とみる研究もあるので、文学作品としての観点からのみ分析することには、一考の余地があるのではないだろうか。

事典では、この項の最後でモチーフの変遷が19世紀の文学の影響の下で生じたことについて触れている。さまよえるオランダ人は、当時の文学の伝統の中に様々な形で織り込まれていった。しかしながら、口頭や筆記による伝承の中でオランダ人伝説はどんどんその内容を変えられていっただけではなく、文学作品へととりあげられる中には、短・長編小説やリート、劇作品などさまざまな翻案形式があり、さらにそれらの形式の伝統にのっとりることにより、伝説は形を変えていった。20世紀には、当時の実証主義的傾向により、オランダ人物語はさらにそのモチーフの内容を変えていくこととなった。

4. 物語の役割

文学の枠外において、18世紀から遅くとも19世紀にいたるまでは、オランダ人伝説は、帆船による航海途上で話される、現実味を帯びたおしゃべりのネタであった。また、オランダ人伝説は、嵐や災難の前兆として、当時の船乗りたちの幽霊船信仰の一つとして彼らの意識化にしっかりと根ざしていた。一方で、さまよえるオランダ船の永劫の罰の理由付けは、彼らの間ではなされることはなかったし、むしろ罪を負わされていることは、知られてもいなかったか、知っていたとしても事実と考えられることはほとんどなかったとされる。そしてこの主題は、船乗りたちの現実性によって片付けられ、むしろ想像力豊かな船乗りたちの一

つの暇つぶしの種となっていた。しかし、船舶と航海術の発展と共に、オランダ人伝説は、次第に船乗りたちの話題から消えていくこととなった。

おわりに

以上、ドイツのメルヒェン事典に従って、さまよえるオランダ人伝説、さらにはオランダ人物語についてみてきた。冒頭で述べたように、現在『さまよえるオランダ人』はワグナーの作品として知られ、その研究もまた、ほとんどがワグナー作品と関連している。しかし、特にオランダ人物語としては、さまよえるオランダ人またはオランダ船の存在を謎にしたままで終わるもの、一応の解決を与えているものとさまざまであり、実に多様な解釈が可能である。永劫の罪を与えられた船長から、我々は永遠に残る謎を与えられたのかもしれない。

本論で紹介した作品

Samuel Tayler Coleridge: “The Rime of the Ancient Mariner” (1798)

Walter Scott: “Rokeby”(1813)

anonym: “Vanderdecken’s Message Home; Or, the Tenacity of Natural Affection “In: Blackwood’s Edinburgh Magazine(1821)

Edward Fitzball: “The flying Dutchman or the Phantom ship” (1826)

Wilhelm Hauff: „Die Geschichte von dem Gespensterschiff“: In: „Die Karawane“ (1826)

Heinrich Smidt: „Der ewige Segler“ (1828)

Heine, Heinrich: „Aus den Memoiren des Herren von Schnabelewopski“ (1833)

Richard Wagner: „Der fliegende Holländer“ (1841)

anonym: „Über den Ursprung der Sage von dem fliegenden Holländer, oder Gespensterschiff“: In: Das Ausland. Ein Tageblatt für Kunde des geistigen und sittlichen Lebens der Völker (1841)

その他の作品については、次のホームページを参照のこと：<http://www.lesekost.de/themen/HHL07FH.HTM> (2005/06/22)

参考文献

- anonym: Über den Ursprung der Sage von dem fliegenden Holländer, oder Gespensterschiff.
In: Das Ausland. Ein Tagblatt für Kunde des geistigen und sittlichen Lebens der Völker,
Nr. 237. 25. August 1841, S. 945-946
- anonym: Vanderdecken's Botschaft in die Heimath, oder die Gewalt der Verwandtenliebe. In:
Morgenblatt für gebildete Stände, Nr. 165-167, 1821.
- Barth, Johannes: Neues zum Fliegenden Holländer; Die bislang unbekannte erste Mitteilung
der Sage in deutscher Sprache und Wilhelm Hauffs Geschichte von dem
Gespensterschiff. In: Hrsg. Rolf Wilhelm Brednich und Hans-Jörg Uther: Fabula;
Zeitschrift für Erzählforschung, Göttingen: Kurt Ranke, 1994, Bd. 35, S. 310-315.
- Encyclopedia of Literature, Merriam-Webster, Incorporated, 1995.
- Enzyklopädie des Märchens, Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden
Erzählforschung, Bd. 4. Walter de Gruyter, Berlin, 1984.
- Fitzball, Edward: The flying Dutchman; or, the phantom ship: a nautical drama in three
acts. In: 19th century English and American plays(microfiche). 1977.
- Gerndt, Helge: Fliegender Holländer und Klabautermann: Göttingen: Verlag Otto Schwartz
&CO., 1971.
- Golther, Wolfgang: Der Fliegende Holländer in Sage und Dichtung. In: Zur deutschen Sage
und Dichtung, Leipzig, 1911.
- Heine, Heinrich: Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke: [Düsseldorfer Ausg.] hrsg.
v. Manfred Windfuhr. Hamburg: Hoffmann und Campe, 1975-1997.
- Laroche, Bernd: Der fliegende Holländer; Wirkung und Wandlung eines Motivs Heinrich
Heine-Richard Wagner-Edward Fitzball-Paul Foucher und Henry Revoil/Pierre Louis
Dietsch. Frankfurt am Main; New York: Peter Lang, 1993.
- Loewenthal, Erich: Studien Heines „Reisebildern“. Berlin und Leipzig: Mayer und Müller,
1922.
- Scott, Walter: The Poetical Works of SIR WALTER SCOTT/ with the author's introductions
and notes: edited by J. Logie Robertson. London: Oxford University Press, 1926.
- Smidt, Heinrich: Seegemälde. Christian Ernst Kollmann, Leipzig, 1828.
- The National Union Catalog; Pre-1956 Imprints, Vol. 174.: London, Mansell, 1971.
- The Oxford Companion to the Theatre, Edited by Phyllis Hartnoll,, Oxford University
Press, Oxford, 1983.
- The Concise Oxford Companion to the Theatre, Edited by Phyllis Hartnoll, Peter Found,
Oxford University Press, Oxford, 1992.
- The Oxford Encyclopedia of Theatre & Performance, vol. 1, Oxford University Press,
Oxford, 2003. S. 470.

酒 井 友 里

- Wagner, Richard: Der fliegende Holländer; Texte, Materialien, Kommentare: hrsg. v. Attilia Csampai und Dietmar Holland, Rowohlt, 1982.
- Woeller, Waltraud: Die Sage vom Fliegenden Holländer. In: Deutsches Jahrbuch für Volkskunde 14: Berlin: Institut für Volkskunde an der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1968.
- 上島健吉編 『対訳コウルリッジ詩集』、岩波書店、2002年。
- 桂田利吉 『コウルリッジ研究』、法政大学出版局、1969年。
- 杉浦昭典 『われら船乗り—海の慣習と伝説—』、朝日新聞社、1975年。
- 高瀬彰典 『コールリッジの文学と思想』、千城、1989年。
- 舟木重信 『詩人ハイネ—生活と作品—』、筑摩書房、1965年。
- 山下登 『コウルリッジ研究—想像力と空想力の区別—』、大地社、1981年。
- 『18-19世紀英米文学ハンドブック』、南雲堂、1985年。
- 『幻想文学大事典』、国書刊行会、1999年。
- 『大百科事典』12、平凡社、1985年。
- 『妖怪と精霊の事典』、青土社、1995年。